

1. C 言語の誕生

ごちゃごちゃのOS

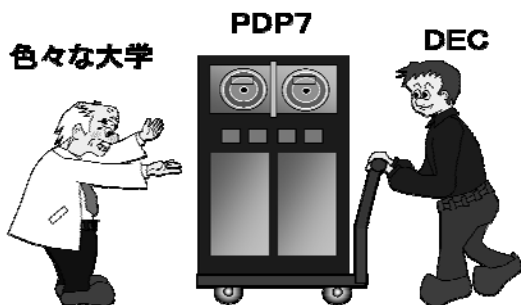
1960年代、IBM360という汎用大型コンピュータのOSの開発作業は困難を極め、大幅に遅れて完成したそうです。変更に変更を重ねて出来上がったものですから、かなり複雑になってしまいました。

作った会社の担当者しか分からないほど、ごちゃごちゃしたOSです。大学でOSを教える先生たちが困ってしまったのだそうです。

手作りのOSとBCPL言語

「捨てる神あれば救う神あり」ということでしょうか。当時の米国DG社のミニコンNovaに対抗して、米国DEC社は、大学や研究機関に自社のミニコンを無料で貸したり、安く提供し始めました。

そのコンピュータは、PDP7というミニコンです。「ミニ」と言ってもパソコンにくらべたら、はるかに大きいコンピュータです。



米国のマーチン・リチャードという先生が「手作りのOS」を設計し始めました。

まず、システムを記述するために設計した言語が、BCPL(ビーシーピーエル)という言語。この種の言語をシステム記述用言語といいます。

BCPLで機械語に近いところを記述するための言語が、アセンブラじみたBという言語。ケン・トーマスという先生が開発しました。

このBで書かれたPDP7上の手作りOSが、UNIXのルーツです。UNIXは、いわばメーカから独立した研究グループが中心になって作ったOSなのです。

UNIXをCで書き直した人

その頃、流行っていたオランダのダイクストラ先生の「構造化プログラミング」の考え方を取り入れて、1973年にシステム記述用言語を作った人がいました。AT&Tベル研究所のデニス・リッチーです。デニス・リッチーは、BCPLの2番目の文字をとって、「C」と名付けました。

UNIX自体がOSを分かりやすいものになろうという試みですから、デニス・リッチー先生は、B言語で書かれたOSのほとんどをC言語で書き直してしまったのです。

